

慣用句「鳥肌が立つ」の使用実態調査

——近現代の用例を中心に——

呉 琳

要旨 「鳥肌が立つ」という慣用句は本来、寒気や恐怖を表す表現であった。近年では、感動や興奮した場合にも「鳥肌が立つ」という表現が用いられる。この用法はしばしば「誤用」とされてきたが、現在では、それが広く使用されているため、辞書にも追認されるようになった。小林(2007)によると、そうした用法は1980年代から広まりはじめた用法であるという。しかし、これまでのところ、具体的な使用実態調査はなされていない。

この慣用句は現在、どのように使用され、その意味・用法はどのような変遷を経てきたのか。この疑問を解決するために、本研究ではコーパスからの用例採集を行い、各種の意味・用法について例示しつつ検討した上で、この表現の使用状況及びその変化を探る。

キーワード 「鳥肌が立つ」 意味・用法 コーパス 用例採集 経年変化

慣用語「鳥肌が立つ」考探

——以近现代日语为中心——

提要 日语中「鳥肌が立つ」这一惯用语以往常用来形容寒冷或恐惧，而用它来表达感动或兴奋等正面的情感则通常被认为是一种误用，但是使用这种表达方式的人越来越多，以致于近年来出版的权威字典都不得不将其收录在内。小林(2007)指出，这一用法始于上个世纪八十年代，但是至今为止还没有人对该惯用语各类用法的使用情况进行过具体的调查研究。该惯用语的意义及用法经历了怎样的变化，现代日语中经常出现的又是哪种用法呢？以下本文将从语料库中搜集大量用例，将其进行分类整理，进而对这些问题逐一进行探讨。

关键词 「鳥肌が立つ」 语义及用法 语料库 用例采集 历时变化

はじめに

現代日本語では、「鳥肌が立つ」という慣用句¹⁾をよく見聞きする。これは本来、寒気や恐怖、あるいは不快感などのために、人の皮膚が毛をむしりとった後の鶏の皮の表面のようにぶつぶつになる現象を指す。しかし、近年では、感動や興奮した場合にも「鳥肌が立つ」という表現が用いられる。

この言葉の用法に関する興味深いデータとして、平成13年度(2001)の文化庁「国語に関する世論調査」がある。「a 余りのすばらしさに鳥肌が立った」「b 余りの恐ろしさに鳥肌が立った」という二つの言い方のどちらを使うかを尋ねた結果、すべての世代において、bの使用率がaを上回ることで、そして、若い世代においてaの浸透率が高いことが窺われた。小林(2007)によると、そうした用法は1980年代から広まりはじめた用法であるという。しかし、これまでのところ、具体的な使用実態調査はまだなされていない。

本研究では、各種辞書における意味記述を参考にした上で、「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる多様な用法を三種類に大別する。

I 本来の用法

II ネガティブな用法

III ポジティブな用法

このうち、I 本来の用法とは、寒さを感じるときに使う用法を指す。II ネガティブな用法とは、否定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、恐怖や不快などが挙げられる。また、III ポジティブな用法とは、肯定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、感動や興奮などが挙げられる。I と II は従来、正しいとされる用法、いわゆる「正用」、III はしばし

1) 慣用句という用語に対し、様々な立場から定義がなされてきた。これについて宮地(1982)は、「単語のふたつ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だ」と慣用句の定義を述べる。この定義は現在まで広く引用され、多くの賛同を得ているので、本研究もこの定義に従う。なお、慣用句としての意味の成立には、比喩が重要な役割を果たしている。したがって、後述のように、慣用句を一種の比喩表現とみなすことができる。

ば「誤用」とされる用法である。はたしてこの言葉は、I 本来の用法から II ネガティブな用法、さらに III ポジティブな用法へと意味変化の方向性を見ているのか。そして、日常よく見聞きするのはどちらの用法であるのか、こうした疑問が本研究の出発点である。

この疑問を解決するためには、「鳥肌が立つ」という慣用句が現在、どのように使用されているのか、またその意味・用法はどのような変遷を経てきたのかを調査する必要がある。そこで、本研究は「鳥肌が立つ」という慣用句の使用状況を調査し、その意味・用法の変遷を辿らうとするものである。なお、本研究は、日本語において、「正用」や「誤用」について結論を出そうとするものではない。あくまでこの表現の使用実態を明かすことが本研究の主題である。

以下では、まず、近現代の各種辞書における「鳥肌」の意味記述を確認する（第1章）。ついで、新聞記事データベース（第2章）、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（第3章）、近代語のコーパス（第4章）から「鳥肌が立つ」の用例採集を行い、各種の意味・用法について例示しつつ検討した上で、この表現の使用状況及びその変化を探る。最後に、このような意味・用法の広がりが発生・定着した原因について、調査結果を踏まえ、言語変化の側面からの分析を試みる。

1. 各種辞書における意味記述

まず、『日本国語大辞典』第2版には「とりはだ（鳥肌）」の下位項目として「とりはだが立（た）つ」を立てて、次のように解説する。

「とりはだだつ（鳥肌立）」に同じ。*河海抄（1362頃）十七「さむき時鳥はだの立を云也、詩に鶏皮と云是也」*匠材集（1597）一「いららきたる とりはたのたつかほをいふなり」*不在地主（1929）〈小林多喜二〉一〇「健は身体に鳥膚が立つ程興奮を感じた」

これによると、「鳥肌が立つ」の初出は室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』（1362頃）であり、寒いときに使われる表現である。

小林多喜二（1903-1933）の『不在地主』（1929）に見える興奮の用例が興味深い。

以下では、「とりはだ」の項目にどのような記述がなされたかについて、近現代の国語辞典を調査する。見出し語「鳥肌」の有無、説明文に寒さの用法の有無、ネガティブな用法の有無、ポジティブな用法の有無、「鳥肌が立つ」の立項の有無に着目して調査を行った。その結果は表1のとおりである。

「とりはだ」の欄の○は見出し語として立項されていること、○の後に付する（鳥肌）や（鳥膚）はその表記、「寒さ」「恐怖」「興奮」の欄の○は言及されていること、△は用法が「鳥肌」の解釈には見えないが、「鳥肌が立つ」の解釈や例文に見えること、「鳥肌が立つ」の欄の○は「鳥肌が立つ」が立項されていること、△は立項されていないが、掲載した用例に見えることを示す。

以上の国語辞典の調査から次の点が分かった。

(1) 『ことばのその』以外、すべての辞典に「とりはだ」の項目が見える。

その表記は「鳥肌」か「鳥膚」とするが、前者のほうが多く見られる。

(2) 「鳥肌」という言葉の意味について、ほとんどの辞書において、寒さを表す用法が取り上げられている。これに対し、ネガティブな用法は1935年『辞苑』以降の辞典から取り上げられるようになった。1990年代後半から、ポジティブな用法も少しずつ辞書に追認される傾向を見せている。

(3) 「鳥肌が立つ」が立項されるようになったのは1972年『新明解国語辞典』初版が最初であり、I本来の用法とIIネガティブな用法が見える。

辞書の記述からみれば、「鳥肌」という言葉は当初、もっぱら寒さを表していたが、1930年代後半から恐怖などのネガティブな用法も表すようになった。ポジティブな用法はそれよりさらに遅れている。「鳥肌が立つ」の意味・用法は構成要素「鳥肌」の意味・用法に左右されつつ変遷してきたのか。次章以降では、各種データベースを用いて、この表現の意味・用法を調査したい。

慣用句「鳥肌が立つ」の使用実態調査

表1 国語辞典における「鳥肌」の記述

刊行年	書名	とりはだ	寒さ	恐怖	興奮	一が立つ
1884-85	『ことばのその』	—	—	—	—	—
1888	『漢英対照いろは辞典』	○ (鳥膚)	○	—	—	—
1888	『ことばのはやし』	○	—	—	—	—
1889-91	『言海』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1892-93	『日本大辞書』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1894	『日本大辞林』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1896	『日本大辞典』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1896	『帝国大辞典』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1898-99	『ことばの泉』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1911	『辞林』改訂第18版	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1915-28	『大日本国語辞典』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1925	『広辞林』新訂版	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1927	『改修言泉』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1932-37	『大言海』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1935	『辞苑』	○ (鳥肌)	○	○	—	—
1936	『大辞典』第19巻	○ (鳥肌)	○	○	○	—
1943	『明解国語辞典』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1949	『言林』	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1954	『辞海』縮刷版	○ (鳥膚・鳥肌)	○	○	—	—
1955	『広辞苑』第1版	○ (鳥肌)	○	—	—	—
1963	『岩波国語辞典』第1版	○ (鳥肌)	○	○	—	—
1969	『広辞苑』第2版	○ (鳥肌)	○	○	—	—
1971	『岩波国語辞典』第2版	○ (鳥肌)	○	○	—	—
1972	『新明解国語辞典』初版	○ (鳥肌)	△	△	—	○
1973	『広辞林』第5版	○ (鳥膚・鳥肌)	○	○	—	○
1976	『広辞苑』第2版補訂版	○ (鳥肌)	○	○	—	—
1978	『学研国語大辞典』初版	○ (鳥膚・鳥肌)	△	△	—	○
1979	『新明解国語辞典』第2版	○ (鳥肌)	△	△	—	○
1979	『岩波国語辞典』第3版	○ (鳥肌)	○	○	—	○
1981	『新明解国語辞典』第3版	○ (鳥肌)	△	△	—	○
1983	『広辞苑』第3版	○ (鳥肌)	○	○	—	△
1986	『岩波国語辞典』第4版	○ (鳥肌)	○	○	—	○

1988	『学研国語大辞典』第2版	○(鳥肌・鳥膚)	△	△	—	○
1988	『大辞林』初版	○(鳥肌)	○	○	—	○
1991	『講談社国語辞典』第2版	○(鳥肌・鳥膚)	○	○	—	○
1991	『広辞苑』第4版	○(鳥肌)	○	○	—	△
1995	『三省堂国語辞典』第4版	○(鳥肌・鳥膚)	○	○	—	○
1995	『大辞林』第2版	○(鳥肌)	○	○	—	○
1996	『新明解国語辞典』第4版	○(鳥肌)	△	△	—	○
1996	『岩波国語辞典』第5版	○(鳥肌)	○	○	○	○
1997	『新明解国語辞典』第5版	○(鳥肌)	△	△	—	○
1998	『広辞苑』第5版	○(鳥肌)	○	○	—	△
2000	『岩波国語辞典』第6版	○(鳥肌)	○	○	○	○
2001	『日本国語大辞典』第2版	○(鳥肌)	○	○	△	○
2005	『新明解国語辞典』第6版	○(鳥肌)	△	△	—	○
2006	『大辞林』第3版	○(鳥肌)	○	○	○	△
2008	『広辞苑』第6版	○(鳥肌)	△	△	△	○
2009	『岩波国語辞典』第7版	○(鳥肌)	○	○	○	○
2012	『新明解国語辞典』第7版	○(鳥肌)	△	△	△	○

2. 新聞記事データベースを利用した使用実態調査

2.1 調査概要

本章では、利用できる代表的な新聞記事データベースのなかから、朝日新聞記事データベース『聞蔵II ビジュアル』に絞り込み、「鳥肌が立つ」の用例を調査分析する。まず、1984年から2014年10月31日までのおよそ30年間の記事を対象に、表記のゆれと動詞の活用形を考慮して「鳥肌が立+鳥肌がた+鳥膚が立+鳥膚がた+とりはだが立+とりはだがた+トリハダが立+トリハダがた」²⁾で検索したところ、1,759件³⁾がヒットした。見出しに検索

2) これらの表記のなかで、最も多いのは「鳥肌が立」(1,452件)で、「鳥肌がた」(297件)がそれに次ぐ。

3) この数字はヒットした記事の総件数を表すものであり、検索語が出現した例文の数を数えたものではないことを断っておきたい。たとえば、同一の記事において、見出しと

語が見えるが、著作権などの関係で本文を表示できないため、意味・用法の確認ができない例1件と以下のようなメタ言語的な例13件を除くと、残り1,745件となる。

(1) サッカーの試合で「ゴールが決まって鳥肌が立った」と選手やサポーターが話します。でも辞書では「鳥肌が立つ」とは「寒さや恐怖などで人の皮膚が毛をむしりとった鳥の肌のようになること」。読者の方からも誤用との指摘があります。では、興奮や感動で鳥肌が立つことはないのでしょうか。(下線は筆者による、以下同様)(2005年1月30日朝刊)このような用例は「鳥肌が立つ」という言葉の意味自体を問題にする記事であるため、本研究では研究対象から除外する。

この1,745件の用例に出現した「鳥肌が立つ」は如何なる用法として使用されているか、これについて判断する際、筆者はまず各種の用法と共起する主なキーワードを以下のように分類・整理した(下位分類の用法は〈 〉で示す)。

I 本来の用法

〈寒さ〉:「寒い」「冷え切る」「冷え込む」「冷氣」など

II ネガティブな用法

〈恐怖〉:「恐ろしい」「危険」「恐怖(感)」「怖い」など

〈嫌悪感・抵抗感〉:「嫌」「嫌い」「嫌悪感」「不快」など

〈衝撃〉:「あきれる」「(良くない意味で)驚き」「衝撃(的)」など

〈緊張〉:「緊張(感)」など

〈その他〉:「気持ち悪さ」「不安」「恥ずかしさ」「退屈」「絶望」「悔しさ」

III ポジティブな用法

〈驚き〉:「(良い意味で)驚き」「意外」「(良い意味で)衝撃」など

〈感動・感激〉:「感慨深い」「感激」「感動」など

〈興奮〉:「快感」「興奮」「ドキドキ」「奮い立つ」など

本文の複数の箇所に検索語が現れた場合は1件とみなした。しかし、同じ発言が複数の記事に引用される場合はそれぞれ1件として数えた。

〈すばらしさ〉:「圧倒される」「美しい」「すごい」「すばらしい」「絶妙」
など

〈達成感〉:「～してよかった」「できた瞬間」など

〈喜び〉:「うれしい」「歓喜」「たのしい」「喜び」など

そして、以下の作業手順に沿って、用例分析を行った。

まず、Ⅰ本来の用法、Ⅱネガティブな用法、Ⅲポジティブな用法のどれに当てはまるかを判断する。次いで、下位分類の用法を分析する際、前後の文脈に上記のキーワードが現れた場合はそれに従う。もし、前後の文脈に上記のキーワードが現れない場合、筆者が記事の全文や関連する記事を読み、どちらの用法に近いかを判断する。

なお、用法分類の際は、あくまで前後文脈に出現したキーワードを優先させた。以下のように、同じ甲子園開会式の入場行進で、選手それぞれが違う意味合いで「鳥肌が立つ」を用いる場合、(2)をⅢの用法(興奮)、(3)をⅡの用法(緊張)とそれぞれ判断した。

- (2) 開会式が終わって仲間のもとに戻ってきた△△、△△両選手は「選手宣誓を聞きながら鳥肌がたつてしまった。県大会と比べて拍手の音も観客の人数も全然違う」と興奮がまだ冷めない口ぶりだった。

(1996年8月9日朝刊)

- (3) 大阪大会の準決勝で延長十回裏に逆転サヨナラ勝ちの本塁を踏んだ△△君は「選手宣誓が終わって観客席からの拍手を聞いたとたん、全身に鳥肌が立った。すごく緊張していた。(後略)」と、笑顔をのぞかせていた。

(1996年8月9日朝刊)

2.2 各種用法の用例について

この1,745件の用例に出現した「鳥肌が立つ」の意味・用法について分析すると、まず以下のような記事がある。

- (4) 今年の夏、二度、鳥肌が立った。(2005年12月27日朝刊)

この「二度」とは、同年8月20日の甲子園で駒大苫小牧が57年ぶりの連覇を達成した瞬間と2日後の8月22日「野球部長が生徒に暴力をふるった

らしい」と知ったときであるという内容が続きの文から分かった。対象語は、「連覇を達成した瞬間の喜び」というⅢの用法と「暴力をふるったと知ったときの衝撃」というⅡの用法の両方が読み取られる。このように、ⅡとⅢ両方の用法として使用される例がわずかながら6件あった。

この6件を除き、残り1,739件の用例には、Ⅰが45件、Ⅱが327件、Ⅲが1,367件ある。表2は各種の用法の用例数を年ごとにまとめたものである。

時間の経過に伴う各種用例数の変化はグラフ1の如し。

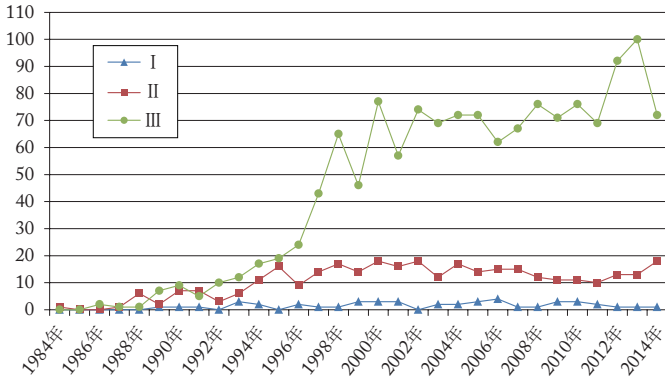
1,739件のうち、Ⅰ本来の用法として使用されている記事はきわめて少なく、全体の2.59%を占めている。毎年の用例数は0例から4例の間で変動し、激しい用例数の増減は見られない。この45件の中には、主に次のような記事が多い。

- (5) 海から上がると、芯まで冷え切った体は赤くなり、鳥肌が立ったままだった。
(2010年1月6日朝刊)

これは長崎市の皇后島（通称ねずみ島）に約100年続く正月行事、寒中水泳「泳ぎ初め式」が行われたときの記事であった。午前10時すぎ、12度の

表2 各種用法の年間用例数

年	用法			対象外	年間用例総数
	I	II	III		
1984	0	1	0	0	1
1985	0	0	0	0	0
1986	0	0	2	0	2
1987	0	1	1	0	2
1988	0	6	1	0	7
1989	1	2	7	0	10
1990	1	7	9	0	17
1991	1	7	5	1	14
1992	0	3	10	0	13
1993	3	6	12	0	21
1994	2	11	17	0	30
1995	0	16	19	0	35
1996	2	9	24	1	36
1997	1	14	43	1	59
1998	1	17	65	1	84
1999	3	14	46	1	64
2000	3	18	77	2	100
2001	3	16	57	0	76
2002	0	18	74	0	92
2003	2	12	69	1	84
2004	2	17	72	1	92
2005	3	14	72	2	91
2006	4	15	62	2	83
2007	1	15	67	1	84
2008	1	12	76	1	90
2009	3	11	71	1	86
2010	3	11	76	0	90
2011	2	10	69	1	82
2012	1	13	92	1	107
2013	1	13	100	2	116
2014	1	18	72	0	91
総用例数	45	327	1,367	20	1,759
割合(%)	2.59	18.80	78.61		



グラフ1 新聞記事データベースにおける各種用法の年間用例数推移

水温という過酷な状況で、海で立ち泳ぎをしながら水球ボールのパス回しをする。強い寒さに刺激され、体に鳥肌が立ったことは想像に難くない。つまり、これは実際身体に起こった生理現象を指す用例である。ほかの用例もすべて同様に、寒さを感じる時、体に「鳥肌が立つ」という現象自体を表現している。

II ネガティブな用法の用例数は全体的に不規則な走向を呈しているが、2000年あたりをピークにやや減少する傾向にあると言えよう。内容としては、以下のような恐怖を感じる時に使用される記事が数多くある。

- (6) 「あの時の恐怖は今も忘れられない。思い出だけで鳥肌が立つくらいだ」。鹿児島市喜入支所嘱託職員の△△さん（61）は、未知との遭遇を回想する。（2010年6月19日朝刊）

IIの下位分類に位置する用例をみると、戦争や地震、津波などの被害状況や事件を实际目にしたときの恐怖、あるいはテレビの映像を見た時の衝撃、または苦手なものを見たとき、苦手なものや音を聞いたときに生じる嫌な気持ちを表す用例が数多く見られる。特に恐怖に使われている用例が112件（34.25%）と最も多く、衝撃を表す用例（92件、28.13%）、嫌悪感を表す用例（54件、16.51%）が続く。

しかし、IIの用法が使用される時、実際に体に鳥肌が立ったのかを判断

することは難しい。たとえば、次の2例はどうであろうか。

(7) 昆虫や両生類が大の苦手で、見ただけで鳥肌が立つという松山市内の主婦(37)。 (1998年8月19日朝刊)

(8) 代表の同大3年△△さん(22)が、今春の酒田市長選で友人ら20人に投票の有無を尋ねたら「政治と聞いただけで鳥肌が立つ」「面倒くさい」などの理由で、全員が棄権していたのに驚いたのがきっかけだった。 (2003年10月20日朝刊)

苦手な昆虫を見たとき、実際嫌悪感で体に鳥肌が立つかもしれないが、果たして政治を嫌がる人は、「政治」と聞くだけで鳥肌が立つのであろうか。政治に対する抵抗感があるため、「政治」と聞くだけで嫌な気持ちが出てくる。その嫌悪感がまるで体に鳥肌が立ったときと同じような異様な感覚である。したがって、実際鳥肌が立たなくても「鳥肌が立つ」という比喻表現を用いて、人あるいは物事に対する抵抗感や嫌悪感を示すのではないかと思われる。

一方、Ⅲポジティブな用法に使用されている用例数は78.61%と最も多く、約全体の8割を占める。この用法は約30年の間で、著しく増加しており、現在ではほかの用法より圧倒的に多い。この用法の用例数が最も多い2013年には、年間用例総数116件のうち、対象外の例が2件、Ⅰが1件、Ⅱが13件、Ⅲが100件と全体の86.21%を占める。

このようにそれぞれの年において、ⅡとⅢのどれが優位に立つ用法であるかを見比べた結果、およそ1990年代からⅢの用法がⅡの用法を上回り、そのうち、Ⅲの用法が大幅に増加し、現在では「鳥肌が立つ」という慣用句の主要な用法になったことが分かる。「はじめに」で取り上げた「国語に関する世論調査」が行われた2001年時点では、すでにⅢの用例数がⅡの用例数を超え、使用実態調査は使用意識調査と異なる結果となった。

内容としては、以下のようなすばらしさを表す記事が多く見られる。

(9) 尾張徳川家19、20、21代当主の各夫人の、明治、大正、昭和と三世代にわたるひな壇飾りにずらりと並んだ人形は150体超。2人は「すごい、鳥肌が立ってきた」とその迫力に圧倒された。(2011年3月2日朝刊)

これはひな祭り前日の記事である。「すごい、鳥肌が立ってきた」と発した2人は、あるアイドルグループのメンバーであった。2人は名古屋市の徳川美術館で開かれる特別展「尾張徳川家の雛まつり」を見てまわり、いかにも華やかで、愛らしい、大名家ならではの雛の世界に圧倒された。このように、すばらしい芸術品や美しい景色に圧倒される時、そして、球児が甲子園のグラウンドに入った瞬間、迫ってくるようなスタンドや客席の雰囲気、演奏や歌を聴いて音が共鳴するときに「鳥肌が立つ」という表現がよく用いられる。これらの「すばらしさ」を表す用例は1,367件のうち、合わせて652件(47.70%)ある。ほかにも感動を表す例が236件(17.26%)、喜びを表す例が208件(15.22%)、そして興奮を表す例が180件(13.17%)ある。

さらに、Ⅲポジティブな用法は、スポーツに関する記事において使用率が非常に高いことも、今回の調査を通して明らかになった。Ⅲの用例には2件のうち1件はスポーツに関わる記事であると言い切っても過言ではない。今回『聞蔵Ⅱビジュアル』を用いた調査結果では、Ⅲの用法に使用されている1,367件のうち、野球に関する記事が533件、サッカーや水泳などその他のスポーツに関する記事が252件あり、合わせて785件となる。

Ⅲポジティブな用法の用例が非常に多く見られるが、しかし、これらの用例については、多くの場合が単なる比喩表現であるとも考えられ、実際体に鳥肌が立ったかどうかの判断は難しい。たとえば、以下の2件を見てみよう。

(10) 狭い道路をトラックで走っていた△△さん(57)は「白煙に気が動転して、バックのまま約200メートル走って逃げた。思い出しても鳥肌が立つ」と語った。(1991年5月24日夕刊)

(11) 〈フリービット社長 △△(41)〉

初代総合政策学部長だった△△は、会いにいくとすぐ、自分の名刺に「この学生にご引見ください」と紹介文を書き添えて渡してくれた。「君たちは未来からの留学生だ」という△△の言葉は、「今、思い出しても鳥肌が立つメッセージ」という(2013年7月29日週刊)

例(10)は、1991年5月24日の朝、長崎県雲仙・普賢岳が噴火した記事で

ある。溶岩が崩れ、白煙が沢づたいに走ったのを見て、慌てて避難するふもとの住民たちが「鳥肌が立つ」と語った。つい当日発生したばかりの噴火を思い出すと、そのすさまじい光景がありありと目に浮かぶ。ここの「鳥肌が立つ」というのは、体に実際起こった現象かもしれない。

しかし、例(11)で語り手が思い出すのは、慶應義塾大学に在学したとき、初代総合政策学部長からの熱いメッセージであった。20年くらい前のメッセージを今思い出してもパワーを感じ、体に鳥肌が立つような感じがする。ここの「鳥肌が立つ」というのは単なる比喩表現であるとも考えられる。

2.3 初出例について

では、Ⅲの用法がいつごろから現れたのか。今回の調査範囲で検索したところ、次の記事がもっとも古い。

(12) 地域の再開発で揺れる青森・下北半島の人々を追ったドキュメンタリー映画「六ヶ所人間記」を見て、鳥肌が立つ感動を覚えた。

(1986年7月19日夕刊)

ここまでは1984年以降の記事を対象に検索したが、1984年以前の記事はどうであろうか。1879～1989年の記事を「見出しとキーワード」で検索したところ、見出しとキーワードに「鳥肌が立」に相当する例はなかった。

一方、「鳥肌」／「鳥膚」／「とりはだ」／「トリハダ」のみを検索語として、「見出しとキーワード」で検索した結果、5件の該当があった。これらの例に対し、紙面イメージ(PDF)の表示から「鳥肌」の意味・用法が確認できた。以下、明治・大正、昭和(戦前)、昭和(戦後)に分け、用例の見出しのみを示す。

○1879～1926年 明治・大正

該当なし

○1926～1945年 昭和(戦前)

(13) いれずみオリンピック 鳥肌だっても寒うはない〈写〉

(1936年8月21日東京／夕刊)

○1945～1989年 昭和（戦後）

(14) トリハダ__聴診器 (1965年6月28日東京／朝刊)

(15) 日系人強制収容補償めぐり対立 恥ずかしくて鳥肌 ハヤカワ上院議員 苦勞知らぬと激怒 マツイ下院議員__大戦時の日系人補償問題 (1982年12月16日東京／朝刊)

(16) 冷房病対策 冷やし過ぎは禁物です 鳥肌立ったら危険信号__金曜ひろば (1984年7月6日東京／朝刊)

(17) 「鳥肌の立つ」番組を期待__TV時評 (1989年12月24日東京／朝刊)
明治・大正期に用例が見当たらず、初出は1936年である。初出例は見出しからも分かるが、寒さを感じる時に使う本来の用法である。念のため、紙面イメージのPDF表示を確認すると、江戸彫勇会刺青競艶納涼会で中老の男性が名主瀧の涼風に鳥肌立って、ご自慢のいれずみをすっぱりと見せびらかすという内容であった。やはり、寒さを表す用法であることに間違いはない。

続く4件の例は1945年以降に出現したものである。例(14)は生まれつき、鳥の皮のようにざらざらしている皮膚のことを指す。本研究で取り上げてきた対象とは別の用法であるため、ここでは除外する。

例(15)は、米議会において、強制収容の補償問題をめぐり、日系政治家間で熱い対立が生じ、補償要求を主張する側がいる一方で、「補償請求するなんて恥ずかしくて鳥肌が立つ」と反対発言をする人もいるという記事である。この「鳥肌が立つ」は「恥ずかしくて鳥肌が立つ」とあるから、IIネガティブな用法であると判断する。

また、例(16)の本文に「鳥肌が立つのは温度が低すぎるという危険信号」とあり、I本来の用法であると判断する。

例(17)の本文⁴⁾に、「若手製作者の実験室であることは構わないが、ほと

4) これは1989年12月24日付けの記事であり、PDFで表示した紙面イメージの本文に「鳥肌が立つ」が現れたため、本来は1984～2014年の記事を対象に検索するときもヒットするはずである。しかし、実際検索をかけたときは、この記事はヒットしなかった。1989年の記事を対象に、「『鳥肌の立つ』番組」で検索したところ、この記事の見出し

んどが口あたりのいい映像の冒険で終わっているのが残念である。願わくば、90年代はTVの時代と予感させるような、鳥肌が立つような、番組の出現を期待したい」とある。当時のテレビ放送の現状に対する批判と今後の番組への期待が読み取られる。「鳥肌が立つ」は「すばらしさで鳥肌が立つ」という意味合いを持ち、Ⅲポジティブな用法である。

以上、朝日新聞記事データベースを用いて検索可能な範囲の記事を見たところ、「鳥肌が立つ」という慣用句が最初に現れたのは1982年12月16日付けの記事である。ただし、それ以前には「鳥肌立つ」（1936年8月21日付けの記事）という慣用句の変異形⁵⁾で現れ、Ⅰ本来の用法として使われていた。なお、「鳥肌が立つ」がⅢポジティブな用法で使用される初出例はやはり、1986年7月19日付けの記事であることに変わりはない。

2.4 調査結果

朝日新聞の記事データベースを利用し、「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる各種の意味・用法に使用される用例数の比較や用例数の推移について考察を加えた結果、以下のことが分かった。

第一、Ⅰ本来の用法の使用率が極めて低く、Ⅱネガティブな用法の用例数も比較的少ない反面、現在ではⅢポジティブな用法が約全体の8割を占め、圧倒的に多い。新聞記事データベースを利用した使用実態調査は「国語に関する世論調査」による使用意識調査と異なる結果となっている。かつて誤用

がグリーンで表示し、著作権などの関係で本文が表示できないことになっている。そのため、テキスト本文の検索ができず、上記1,759件の記事には含まれていない。

5) 慣用句の変異形については石田(1998)を参照。慣用句は形式的に固定しており、決まった形として使用されるが、形式上の変化を全く示さないわけではない。たとえば、「目が覚める」「口を出す」「耳に挟む」には、それぞれ構造あるいは構成要素が部分的に異なる複合語や慣用句（「目覚める」「口出し」「小耳に挟む」）がある。これらの複合語や慣用句のように、ある慣用句と形式的かつ意味的に対応関係にある表現形式を「慣用句の変異形」と呼ぶ。石田は、部分的に一致する二つ（以上）の表現形式は、語彙体系のレベルでは同等の資格を持ち、互いが互いの変異形であるとして、これを共時的な視点から検討している。本稿に言う「変異形」もまた、共時的な観点から、二つの表現は、互いが互いの変異形の関係にあるものとして、これを「変異形」と表現する。

扱いされていたⅢポジティブな用法は、現在では、もはや市民権を得た用法として広く使用されていることが分かった。

第二、Ⅱネガティブな用法の下位分類として、恐怖感を表す用例が三分の一を占め、衝撃、嫌悪感を表す用例数が続いている。一方、Ⅲポジティブな用法の下位分類として、すばらしさを表す用例が最も多く、全体の半分近くある。感動、喜び、興奮を表す用例数が続いている。これらの用法に使用される「鳥肌が立つ」は必ずしも実際の生理現象を表すとは限らず、単なる比喩表現であるとも考えられる。

第三、Ⅲポジティブな用法は、スポーツに関する記事において使用率が非常に高いこと、特に野球に関する記事によく出現することが明らかになった。

第四、複合語「鳥肌立つ」が1936年8月21日付けの記事に現れ、Ⅰ本来の用法として使用されたことがあるが、「鳥肌が立つ」という慣用句自身が最初に現れたのは1982年12月16日付けの記事である。この慣用句をⅢポジティブな用法として初めて使用されるのは1986年7月19日付けの記事であり、およそ90年代以降Ⅲの用法がⅠとⅡの用法を上回り、増加していったことが分かった。

最後に、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの用法はいずれも瞬間的な感情に対して用いることが多いが、しかし、「鳥肌が立ちっぱなし」や「ずっと鳥肌が立っていた」という例も8件見つかった。これらの用例はすべてスポーツに関する記事であり、Ⅲの用法として使用されていることが分かる。また、Ⅰの用例は発話文⁶⁾に出現することがないが、ⅡとⅢの用法に関してみれば、発話文に出現することが多い。

以上、新聞記事データベースを利用し、現代日本語における用例を中心に分析を行った結果、いくつかの結論に至った。しかし、このような調査結果

6) ここに言う「発話文」とは、実際の会話のなかで発話された文のことを指す。今回の調査で、対象語はよく発話に出現し、それが複数の記事によって取り上げられることがある。

は新聞記事データベースという調査材料の性質によるものか。新聞記事データベースによる調査結果は現代日本語全般に共通する特徴を反映しているのか。次章では、この調査結果と対比させるべく、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の用例についても調査分析を行いたい。

3. 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の用例調査

3.1 用例の概要

BCCWJ から用例収集を行った結果、「鳥肌が立」が32例、「鳥肌がた」が11例、「とりはだかた」が2例、「トリハダが立」が1例、全部で46件ある。用例の出典は出版物として刊行された書籍やWEB上の文書（Yahoo! 知恵袋 Q&A 掲示板）のテキストである。また、書籍の刊行年代は1991～2005年のものが多いが、1982年（I 寒さの用法）と1984年（II 恐怖の用法）も各1例ずつ見つかった。Yahoo! 知恵袋は、すべて2005年のものである。以下、書籍と Yahoo! 知恵袋を区別しつつ、意味・用法の分類を行う。なお、用法

表3 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』調査結果

用法	書籍	Yahoo! 知恵袋	合計	全体比 (%)
I 寒さ	9	1	10	21.74
	9	1	10	21.74
	4	4	8	17.39
II 気持ち悪さ	1	3	4	8.70
	2	1	3	6.52
	1	0	1	2.17
II 合計	17	9	26	56.52
III すばらしさ	2	3	5	10.87
	2	1	3	6.52
	1	0	1	2.17
III 合計	5	4	9	19.57
その他	1	0	1	2.17
総計	32	14	46	100.00

の判断基準は新聞記事データベースと同様である。

書籍に見える用例の一部を挙げておく。

I 寒さを表す例

(18) 「初夏とは言え、夜は冷えます」

「いらないわよ」

突っ撥ねたが彼女の二の腕には鳥肌が立ち、寒さを我慢しているのが見え見えである。 高里椎奈『本当は知らない：薬屋探偵妖綺談』

II 恐怖を表す例

(19) 部屋が歪んでいる。奥行きが倍にもなって、天井が頭にくつつきそうな低さに垂れ下がって来る。押し潰される！恐怖に鳥肌が立った。

赤川次郎『華麗なる探偵たち：ユーモア・ミステリー』

II 嫌悪感・抵抗感を表す例

(20) ひとつたまりもないという意の、卑俗な形容を耳に流し込まれると、自己嫌悪感で全身に鳥肌がたった。夏目の発音の汚らしさは、自分が本当に汚らしい人間であるように中学生には感じられた。

姫野カオルコ『ツ、イ、ラ、ク』

II 気持ち悪さを表す例

(21) 重さは中くらいで、カバーの布は節玉のある糸で織られている布団なら、ゆったりくつろげる。それ以外の物だと、鳥肌が立ってしまう。

ニキリンコ／リアン・ホリデー・ウィリー『アスペルガー的人生』

II 衝撃を表す例

(22) そんなおり、最終稿を書き終える直前、まるで物語の設定をなぞるように、小渕首相が突然病気に倒れられたときは、私自身、鳥肌がたったものだ。

幸田真音／児玉清『日本国債』

II 緊張を表す例

(23) 無言の提案と無言の拒絶が宙を飛び交い、それがふたたびふたりの上に舞い降りた。ソヨンの腕に鳥肌が立った。背筋にゾクリとした戦慄が、胸には同心円の波紋が広がった。ソヨンがその緊張にもうこれ以上耐えられないと思ったとき、インスがようやく口を開いた。

吉野ひろみ『四月の雪』

III すばらしさを表す例

- (24) 甘ったるい声から哀しみを堪えたような迫真の声に微妙に変化する
あたりに鳥肌がたつ。 林晃三『中島みゆき 歌でしか言えない世界』

III 感動を表す例

- (25) 姿月たちはそのときに「鳥肌が立つほど感動しました」と目を潤ませ
せていたけれど、それだけインパクトがあった訳である（扉写真）。

植田紳爾『宝塚百年の夢』

III 驚きを表す例

- (26) 万引きを常習にしてきた人間に、百万円以上のお金が入った金庫の
鍵を預けるとは、なんという思い切った信頼の示し方でしょう。少年
は、そのショックで皮膚に鳥肌が立ち、次いで湿疹のような斑点が体
に広がったといいます。 濤川栄太『「5つの約束」で子どもは変わる』

3.2 新聞記事データベースの調査結果との対照

まず、対象語が発話文に出現しているのか、それとも発話文以外の文に出現しているのか。引用符を目印に、発話文を探した結果、上記例(25)と次の1件のみが見つかった。

- (27) 彼は一日めから「鳥肌が立つくらい感動」して必要最小限の授業を受ける以外の時間は、生活リハビリクラブのボランティアとして、送迎の車の運転までこなし始める。

三好春樹『じいさん・ばあさんの愛しかた：

“介護の職人”があかす老いを輝かせる生活術』

前掲例(25)の引用符は姿月さんたちの発話であると判断できるが、例(27)のものは前の文脈に「彼」の発話らしきものが見当たらず、「彼」やほかの人の会話をそのまま引用したとは考えにくい。文中の引用符はほかの文の引用であることを示すために付けられたとも思われる。いずれにせよ、この2例の用例総数に占める割合からみれば、発話文における出現率が新聞記事データベースよりはるかに低い。

各種用法について、II ネガティブな用法は最も用例数が多く、26件と全体の56.52%を占める。次いで、I の用例が10件 (21.74%)、III の用例が9件 (19.57%) がある。各種用法の用例数順位は新聞記事データベースを利用した調査結果と異なる。

II の用法について、新聞記事データベースでは、18.80%と2割を切ったが、BCCWJ では、用例数が逆転し、半数以上を占める結果となった。III の用法について、新聞記事データベースでは、8割近くを占めるが、BCCWJ では、2割を切った形となり、両者には大きな開きがある。

新聞記事データベースの用例に発話文が多く引用されることから考えると、この差異は話し言葉と書き言葉という二つの言葉がそれぞれ持っている特徴によるものであろうか。ふつう書き言葉が規範性を持ち、話し言葉はコミュニケーションの場に依存することが多く、規範からの逸脱が少なくないと思われる。したがって、書き言葉となると、本研究冒頭に言及したこの言葉の「正用」が比較的意識され、「誤用」の出現率が下がるのではないかと考えられる。

このほかに、用例のジャンルによる差異も考えられる。スポーツに関する記事では、II の用例数よりIII の用例数が圧倒的に多い。その結果、全体の用例におけるIII の用例数も多くなった。しかし、BCCWJ では、スポーツを素材にした用例が見つからず、III の用例数が少なくなることが予測される。

新聞記事データベースとBCCWJ との調査結果に共通して言えるのは、II の下位分類として、恐怖を表す例が最も多いことである。III の下位分類において、すばらしさを表す用例が最も多いが、しかし、BCCWJ の場合は、III の用法の用例総数が少ないため、すばらしさという用法の優勢は新聞記事データベースほど反映されていない。

総じていえば、二種のコーパスを用いた調査結果が大きく異なり、それぞれのコーパスが持つ特性が反映されている。書き言葉では、I とII の用法が8割前後を占め、「鳥肌が立つ」という表現が本来正しいとされる使い方で使用されていることが窺われる。しかし、書き言葉と話し言葉を一括してみると、III の用法が8割近く占め、優位に立つ用法となる。

ところが、この慣用句の意味変化の方向性について、筆者はⅠ本来の寒さを表す用法から恐怖などのⅡネガティブな用法に派生し、さらにⅢポジティブな用法へと広がってきたと想定したが、新聞記事データベースにおける各種用法の用例の初出年代はそれほど離れておらず、BCCWJにおける用例数も少ないため、今回の調査でこれを裏付けるデータは得られなかった。

この慣用句の意味・用法がどのような変遷を経てきたのかについて解明するためには、調査資料を増やしなが年代をさかのぼり、その使用例について通時的な視点から更なる調査分析が必要である。次章では、この点について検討を加えたい。

4. 明治期から昭和戦前の用例調査

本章では、年代をさかのぼり、明治から昭和戦前における「鳥肌が立つ」の使用状況を調査する。

使用するコーパスとして、小説を収録した『青空文庫』と雑誌を収録した『太陽コーパス』の二種を取り上げるが、その前に、新聞記事データベースの『新聞記事文庫』も調べてみた。2014年11月24日に検索の結果、「鳥肌」／「鳥膚」／「とりはだ」／「トリハダ」のいずれもヒットしなかった。『新聞記事文庫』は経営・経済関係を中心とする新聞記事の切り抜きをデジタル化したものであるため、前掲の新聞記事データベースと比べ、検索対象となる記事の分野に偏りがあると思われる。さらに、同データベースの収録対象紙は大阪発行の主要紙・経済紙に加え、東京発行の各紙、主要地方紙など広範囲にわたっているため、地域の差異も無視できない⁷⁾。このような理由により、検索ができなかったことが推測される。

4.1 『青空文庫』の用例について

文学作品については『青空文庫』（昭和20年以前の作品と断定できるもの

7) 関西では、「鳥肌」のことを「さぶいぼ」「さむいぼ」と言うことがある。

に限定した。2014年11月24日に検索)を用いて用例採集を行った。

『青空文庫』では、2014年11月24日の検索では7件がヒットした。表記の変換を含めた詳細は下記の表4に示す。

表4 『青空文庫』における「鳥肌が立つ」の用例

用法	表記					合計
	鳥肌が立	鳥膚が立	鳥肌／鳥膚がた	とりはだ が立／た	トリハダ が立／た	
I 本来の用法	3	0	0	0	0	3
II ネガティブな用法	3	0	0	0	0	3
III ポジティブな用法	0	1	0	0	0	1
総計	6	1	0	0	0	7

明治期から昭和戦前までの使用例が少なく、そのうち3件がI本来の用法、3件がIIネガティブな用法であり、IとIIの用例数が拮抗していることが明らかになった。各種用法について、一例ずつ挙げておく。

I 本来の用法

(28) 岳の方から薄ら冷い風が吹いて、汗にふやけた五体に鳥肌が立つ、妖しげなヒトデの形をした雲が高い鱗雲の下をのろのろ^はいまわるのが不気味だ、急いで出懸る。 木暮理太郎『黒部川奥の山旅』

II ネガティブな用法

(29) それを得意気に言った時の・お前のうすつべらな・やにさがった顔付を思出し、お前の年齢と経験とを併せて考えると、本当に己は、恥ずかしいのを通り越して、ゾッと鳥肌が立って来るよ。全く。

中島敦『狼疾記』

III ポジティブな用法

(30) 健は身体に鳥膚が立つ程興奮を感じた。 『不在地主』小林多喜二
『不在地主』は『中央公論』の1929(昭和4)年11月号に掲載された作品である。この用例は前述の『日本国語大辞典』第2版にも掲載されている。『不在地主・オルグ』(改造文庫第2部第226篇、小林多喜二著、1933年、改造社、国立国会図書館近代デジタルライブラリー)の原文で確認すると、

「^{けん}健は^{からだ}身体に^{とりはだ}鳥膚が^た立つ程^{ほど}興奮^{かん}を感じた」(173頁)と確かに「鳥膚が立つ程興奮」が用いられている。

『朝日新聞』の記事データベースの初出例より出現時期が早い。しかし、このようなⅢの用法は1件しかヒットがなかったため、当時としては、定着した用法であるとは言い難い。

なお、「鳥肌」を含む用例のなか、「鳥肌になる」「鳥肌立つ」「鳥肌だつ」「鳥肌立てる」「鳥肌を立てる」「鳥肌の立つ(思い)」などがあり、「鳥肌」と一緒に使用する表現はバリエーションに富む。このなかで複合語「鳥肌立つ」/「鳥肌だつ」が合わせて20件あり、その他の用法を除いた17件のうち、6件がⅠ本来の用法、11件がⅡネガティブな用法として使用されており、Ⅲの用例が見られなかった。

4.2 『太陽コーパス』の用例について

雑誌の記事について『太陽コーパス』を用いた調査結果として、次の1件がヒットした。

(31) そしてその鳥はどうしても動いてみなければいけなかった。(中略)

羽の抜けた後には、白い肌にぽつりと粟粒ほどの鳥肌が立つた。

豊島与志雄『本田の死』

『本田の死』は雑誌『太陽』10号(1917年)に掲載された小説である。この作品が収録されている『理想の女』(豊島与志雄著、1921年、隆文館、国立国会図書館近代デジタルライブラリー)の原文で確認すると、「羽の抜けた後には、白い肌にぽつりと粟粒ほどの鳥肌が立つた」(178頁)と確かに同じ文が見える。

この用例はⅠ、Ⅱ、Ⅲのいずれの用法にも当てはまらず、鳥が毛を抜けた後、肌がぶつぶつになることを表現している。本研究で取り上げてきた各種の意味・用法は鳥の肌にとえて人間の肌がぶつぶつになること、さらにそれと似たような感覚で用いた一種の比喩表現である。例(31)は比喩表現以前の段階として用いた用法であると言えよう。

4.3 近代における用例の調査結果

現代語のコーパスに比べ、近代語のコーパスに出現した用例数が極めて少ない。『青空文庫』と『太陽コーパス』から用例採集を行った結果、8例が見つかった。実際の「鳥肌」そのものを指す用例を除いた7例のうち、Iの用例が3例と約半数を占める。IIの用例が3例あり、IIIの用例がわずか1例しかなかった。近代日本語において、「鳥肌が立つ」はほとんどIかIIの用法として使用されていることが明らかになった。

IIIの初出例は1929年小林多喜二の『不在地主』であり、「興奮」と共起していた。それ以外には用例が見つからず、はたしてIIIの用法が当時としては一般的な用法であるか、この点についてはまだ不明である。IIIポジティブな用法の萌芽が認められるとはいえ、実際成立・定着したのは1990年代以降のことであろう。

『日本国語大辞典』第2版によると、「鳥肌が立つ」の初出は室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』(1362頃)であり、寒いときに使われる表現であるという。明治期になってもこの言葉はやはり寒さを表す意味で使われることが最も多く見られた。一方、この時期において、IIネガティブな用法の用例数がIと拮抗することからみれば、用法のひとつとして確立されたとは言えよう。

しかし、現代日本語になると、新聞記事のテキストと書き言葉コーパスを利用した調査結果には大きな差異が見られる。発話文が比較的によく出現した新聞記事の用例では、IIIの用法が圧倒的な優勢を持つのに反して、書き言葉コーパスの用例では、IIの用法が最も多く、Iの用例がそれに続き、両者の用例総数が圧倒的な優勢を持つ。

この表現は本来の寒さを表す意味から広がり、ネガティブな用法をも表すようになった。その後、時代が下るにつれ、書き言葉では、本来の用法とネガティブな用法がまだ正しい用法として意識されているが、話し言葉では、比喩表現としてのポジティブな用法が比較的多く使用されている。

おわりに

では、なぜこのような意味・用法の変化が起こったのか。

そもそも鳥肌が立つという生理現象の起因として、最も想起されやすいのはおそらく寒気であろう。これは、人間の肌を、毛をむしり取ったあとの鳥の肌にとえた表現である。しかし、そのような鳥の肌ははしたなく、良いものとは思えない。寒さで鳥肌が立つとき、皮膚が反射的に収縮し、ある種の妙な気持ちも伴うため、次第にネガティブな用法も生じてきた。

一方、個人差はあるかもしれないが、感動や興奮したときに鳥肌が立つこともある。医学的にも、感情が動けば交感神経が反応することで説明がつく。このように使用する人が多くなると、徐々に用法も定着してきた。数名の母語話者に聞いたところ、感動の用法は、本来の用法ではないことを知ってはいるが、テレビや新聞、周りのみんながそのように使っているから、自分も使っていると言う人も少なくない。

また、「ドキドキする」「ワクワクする」「涙がこぼれる」など感情を表に出す表現と比べ、「鳥肌が立つ」は体の内側で起こる感情の変化であり、それらの表現とどこか違うようにも感じられる。「鳥肌が立つ」に代わる適切な別の言葉を見つけるのは難しく、「鳥肌が立つ」を使用することにより、言葉の隙間を埋めようとしたものと考えられる。

付記：本稿は、中国国家留学基金管理委員会／日本電通育英会の支援による研究成果の一部である。

参考文献

石田プリシラ (1998) 「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5, pp. 43-56

小林賢次 (2007) 「すばらしい演技に鳥肌が立つ」『問題な日本語 その3』北原保雄編著, pp. 40-43

文化庁 (2001) 平成13年度「国語に関する世論調査」の結果について http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h13/kekka.html (確認日：2014年11月5日)

宮地裕 (1982) 「慣用句概説」『慣用句の意味と用法』明治書院, pp. 237-265

コーパス

『青空文庫』／朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』／『現代日本語書き言葉
均衡コーパス』(2009年度版)／『新聞記事文庫』／『太陽コーパス』

呉琳 Wu Lin 北海道大学大学院